

安原貞室『かたこと』における評価表現について

ー 促音・撥音挿入形を例として ー

加藤 大鶴

【キーワード】かたこと 規範意識 貞門 促音挿入 撥音挿入

1. はじめに

ある時代における、言語に対する意識がどのようなものであったか知ることは資料的制約のため容易ではない。とくに、派生関係にある類義語間の語形上の相違がどう意識されていたのか知る手段は限られている。

安原貞室『かたこと』（慶安3年,1650）からは十七世紀初頭～中頃における京都語の諸相をうかがえるだけでなく、それらの言語使用について評価が下されており、当時の規範意識を知ることができる。『かたこと』に見え隠れするそうした規範意識は、取り扱われる言語事象に基づき多様なものとなっている上に、評価表現は明確なものから微妙なものまであり、全体像をつかむのは容易ではない。『かたこと』規範意識についての先行研究は井之口有一・堀井令以知 1972、阿部八郎 1974、白木進・岡野信子 1979 ほかがある。これらの先行研究では内容に即した『かたこと』条文ごとの分類が試みられ、貞室の言語使用における規範意識や、それが何に基づいているのか明らかにされている。本稿では促音・撥音挿入にかかわる各条文の評価表現に注目し、そのような表現を生じた要因について考察する。

2. 『かたこと』の規範意識

『かたこと』条文で取り上げられる言葉の評価のされ方は、基本的に次のようである（条文頭の数字、本文の表記等は白木進 1976 に従った。また振り仮名は（ ）に示した）。

281.[中略]三日(みか)をみつか。四日(よか)をよつかといふがよしと云り。[下略] ①
505.柚柑 (ゆかう) を〇ゆつかうはわろし。[下略] ②

92.ひしとゝいふべきを〇ひつしとゝ詰て云ること如何。[下略] ③

これは次のように抽象化される。

規範形	非規範形	評価表現
-----	------	------

それぞれの条文で下される評価のヴァリエーションは多岐多数にわたるが、①肯定的評価②否定的評価③疑問評価に大きくわけることができる。①には「よし」

「よろし」「よき言葉」ほかがあり、②には「悪し」「わるし」「あしき言葉」「俗語」「ひが言」「いはぬにはしかじ」ほか、③には「如何」「苦しからぬ歎」ほかがある。また評価表現が記されずに、規範形と非規範形が並べられるにとどまる条文も目立つ。こうした評価やその表現のヴァリエーションはどのようにして生まれたのだろうか。

『かたこと』序文には「愚子か見ときやすからんため」に、老師貞徳の「厚恩」をまとめてことばの指南書にしたことが記される。次の二つの条文の傍線部では貞徳のことばが引用される。

10. [中略] 苦しかるまじきかと尋ね侍りしかば。いはぬにはしかじと答へられき。 [下略]

28. [中略] ある人の奴婢（ぬび）をしかるとて。がつきめといへりしを。餓鬼（がき）とこそいふべけれと。老師（らうし）は宣（のたま）へり

もっともほとんどの条文では貞徳のことばは引用されない。また序文の記述は一般的に謙遜の意味を多く含むものと考えられる。よって『かたこと』は師貞徳の影響をある程度受けながらも、貞室自身の規範意識に基づいて編まれていると考える方が自然であろう。同様に、各評価表現も師説の影響のもとに貞室の規範意識が発露したものと考えられる。

また、貞門一門における貞室の位置や『かたこと』刊行にいたる歴史的背景も、本資料の成立と関係がある可能性がある。阿部 1974 では、本資料には「くるしからずとかや」「…と云り」等の伝聞と解釈できる記述から、『かたこと』への貞門一門の影響が示唆される¹。貞徳門下の諸弟間（貞室に限って言えば重頼や季吟）に論争が絶えなかったことは、中村俊定 1944・乾裕幸 1975 で触れられている通りである。特に『かたこと』刊行を5年さかのぼる正保2年に重頼によって刊行された俳諧作法書『毛吹草』に対し、貞室は『氷室守』（正保3）において徹底した論難を加えていることは注目し値する。そこでは連歌で用いられる語とは異なり、俳諧でのそれは俗語的事であることや、語の選択にも限度があることなどが強く述べられている²。こうした議論が『かたこと』編纂直前になされていることは、『かたこと』成立と無関係ではないだろうが、これについては指摘するにとどめる。

¹ 阿部 1974 では「雅俗判断の基準となる諸条件は、著者自身の意見のみならず、師松永貞徳の意見も入れていることも明記されているところから、あるいは貞門一門の日常の意見交換の成果がこの著に含まれているのではないかと考えられる」とする。

² 「縦令ましとは哥に読しかとも。まつ白とはよます。かうやうのこと葉は。只一つ云ても強（つよ）き誹言なれば。残は皆連歌なりとも。誹言よはしとは申かたし。[中略] 道外たること葉は。此道のいのち成へし。[中略] 但あまりに道外過たること葉ならば。人により席（せき）によりて。斟酌も有へき歎。[下略]」（『氷室守』天理図書館 1957 の翻刻 pp.5-6 による）

さて上記の 10 と 28 の条文は、ともに原形(非促音形)と促音形を対比し、原形を規範形とみなしている。『かたこと』の多くの条文は原形と派生形がある場合、前者を規範形とする。次の下線部(1)はそれが最も象徴的にあらわれている。

53. 物のせまりをぜっぴといふこと葉は○是非(ぜひ)といふ心歟。とにかくにぜっぴは浅(あさ)ましき俗語(ぞくご)成べし。[中略] 惣(そう)じて。⁽¹⁾都(みやこ)のこと葉も。昔(むかし)はよかりしかど。いつの程よりや田舎こと葉のまじりて。あしくなりけるとぞ。吉田(よしだ)の兼好法(けんかうほう)しは後宇田院(うだのゐん)の時(とき)の人なり。そのころさへ早(はや)いやしきこと葉のはやり侍るとて。車(くるま)もたげよ。火(ひ)かゝげよといふべきを。もちあげよかきたてよなどいへりしを嘆(なげ)きて。つれ／＼草(くさ)に書(かゝ)れたるにや。⁽²⁾今(いま)はその。もちあげよ。かきたてよが。よきこと葉の品(しな)になり侍るにや。かゝげよもたげよなどいひ侍らば。人笑(わら)ひになり侍るべし。まことに嘆(なげ)かしきことならずや。[下略]

傍線部にあらわれる、原形＝古語＝規範形とする素朴な規範意識は日葡辞書にも見られ、「約 50 年おくれて成った貞室の片言にも明らかに認められる」(森田武 1993, p.513) とされる。ただしこの規範意識は、阿部 1974 や井之口・堀井 1972 で指摘されるように、すでに京都の人々に慣用されていれば派生形・新形でも(口頭語に限り)やむなしとみなされる。次の条文によると現実に変遷しつつある、あるいは使用されている言葉をも貞室は容認していることが分かる。それは前掲 53 の条文の下線部(2)にもあらわれる。兼好法師の言葉を「現在」と相關関係であるとしながら、それでも言葉の変化は不可避的であり、その中を生きなければならないという諦観として示される。

4. 満足といふことも。みちたれりといふやうの時につかふこと葉ならば。まんすうといふべし。[中略] 右の三ヶ条(でう)は。はやうより誤来(あやまりきた)りて人おほく云めれば。今更(いまさら)改(あらた)めがたし。[中略] されども。はれなる消息(せうそこ)の文章(ぶんしやう)などには。心(こころ)すべき事成とかや

5. [中略] うれしきを御嬉(うれ)しきぞなど云るも誤(あやま)りなれと。既(すでに)はや云なれ。又はかな文(ぶみ)にも書来(かききた)り侍れば。今更(さら)改(あらた)めがたしと云り。

82. 大魁(たいくはひ)と云こと葉は○物の相応(さうをう)したることにいふとかや魁(くはひ)は首(しゆ)といふ字註(じちう)侍り。然(しか)るを今俗(ぞく)には。過差(くはさ)なることを大魁(たいくはひ)なりといふは聊(いさゝか)心違(たが)ひ侍る。されど普(あまね)く誤(あやま)り来りて云馴(いひなれ)侍れば今更(さら)改(あらため)がたきこと歟。[下略]

744. そなたこなたの詞(ことば)の事。おのれがことをさしてこなたといひ。あい手の上をいふ時(とき)は。そなたといふべきを頃(このころ)の人は。相手(あい

て)の上をこなたといふ。是等(これら)誤(あやまり)成べけれど。人毎(こと)に云なれ来りたれば。今更(いまさら)改むべきやうなしと云り。[下略]

以上を見てくると『かたこと』の評価は第一に、伝統的な語(古語)を規範形とし、派生形を非規範形とする素朴な言語感覚に基づいていることが分かる。これに師貞徳の教え等や現状を容認する貞室の態度が複雑に結びつき、結果として多様な評価表現のヴァリエーションを生み出しているのではないだろうか。このうち特に現状容認には、非規範的な語の使用が広がりつつあるものから定着したものまで、異なるいくつかの段階があると考えられる。

3. 調査対象と目的

語中に促音・撥音が挿入された語を調査対象とする(促音との比較のため、語末の撥音は対象から除外し、条件を揃えた)。テキストは白木進 1976 の翻刻を中心に、適宜「近代語研究 3,1972」所収の荒木本を参照した。本資料中、撥音音節には「ん」字、促音音節には「は(徒)」「ほ(津)」「つ・り(川)」字が用いられる。なお促音音節には 276 条「ひとつとひ」に見られるように、右傍に片仮名のツを記し、促音であることを積極的に表示したと思しき箇所も認められる。

促音・撥音挿入に触れた条文は、全 800 条中促音 74 条撥音 23 条、合計 97 条にのぼり、約 12%を占める。言葉の総合的な作法書性格を持つ本資料に、音韻のしかも促音・撥音挿入形をめぐる現象の指摘がこれだけ含まれているのは、貞室の規範意識を考える上で相応の意味があると考えた。また前節で述べた現状容認の各段階を推測する上で他資料からのデータが得やすいという利点もあると考えた。

促音・撥音挿入の機能については、主として副詞や形容詞の意味を強調するという指摘がある(浜田敦 1949a・1949b ただし浜田敦 1986 によった)。浜田論文によれば促音は清音カ、サ、タ、バ行の直前に、撥音は濁音ガ、ザ、ダ、バ及び鼻音ナ、マ行の直前にそれぞれ現れ、対立した条件の下に成立しているとされる。また促音・撥音の発生は平安朝初期頃とされながらも両者の音韻的な区別は室町時代末頃まで「極めて漠然たるもの」(p.78)があったという。山口仲美 1973 では中古象徴詞の調査分析を通じ、促音・撥音挿入形等の構造が明らかにされる。柳田征司 1993 (四章第一節)では抄物資料をもとに、接頭語・形容詞・名詞・副詞・擬声擬態語の促音挿入形についての東西差が明らかにされる。ここで次の二点が問題となる。

- ①原形と促音・撥音挿入形はどのように意識され、評価されたか
- ②機能的に類似する促音・撥音挿入形がどのような意識のもとで区別されたか

この二つの問題について、『かたこと』内の記述に注目し、前節で触れた貞室の規範意識の中でどう表現されるのか考察する。

4. 促音挿入形について

促音挿入形について触れられる条文を各評価表現ごとに、(1)中間評価(2)否定的評価(3)肯定的評価、の三つに分類した。(1)の中間評価には、疑問表現「如何」を含むものと評価表現のないものを分類してある。第2節で触れた現状容認がこのグループに入ってくると思われるが、様々な段階を含むためにグループ中で最も複雑な相をなしている。まずはこのグループについて分析することにする。

(1) 中間評価

a. 「如何」を含むもの

10. 中 (なか) 中／＼といふべきを なつかなかぞ。なかなつかぞなど、詰 (つめ) ていふこと如何侍らん。されどもかうやうのこと葉は。時 (とき) により。ことにしたがひて。いはずして叶 (かな) はぬおりも侍るべし。苦 (くる) しかるまじきかと尋 (たづ) ね侍りしかば。いはぬにはしが [ママ] じと答 (こた) へられき。[下略]

貞室の促音挿入形への基本的な姿勢がこの条文にあらわれている。すなわち原形たる「なかなか」を規範形、これに対して促音挿入形である「なつかなか」「なかなつか」を非規範形とみなした上で、「時により。ことにしたがひて」言わざるを得ないこともあるとするのである。ただし師貞徳の言葉を引きつつ、「いはぬにはしかじ」という一線は守る。

次の28条は、使用可能な条件と使うべきではない条件にさらに限定を加える。

24. 唯 (ただ) といふべきを 〇たつた。ただ

25. さきといふべきを 〇さつきに

26. いちといふべきを 〇いつち³

27. ひとつといふべきを 〇ひとつつ⁴

28. 前 (まへ) にも云る。中／＼を。なつかなか。なかなつか

右 (みぎ) いつゝのこと葉を。かやうにつめていふこと如何といふ人も侍り但うへより云つゞけ。又いきおひかゝりていふ時 (とき) は。くるしからじといへども。いはぬにはしかじ。殊 (こと) に物 (もの) に書 (かき) 付くべきことにあらず。

[中略] ある人の奴婢 (ぬび) をしかるとて。がつきめといへりしを。餓鬼 (がき) とこそいふべけれど。老師 (らうし) は宣 (のたま) へり

「うへより云つゞけ。いきおひかゝりていふ時」とは、コンテキストに従って促音を挿入することがあってもよい、ということであろう。10条とあわせて考

³ 岸田武夫 1981 によれば、当該期における他資料の調査をした上で「イッチ」という形をとるのは、副詞として用いられるものに限られていて、名詞としてのイチ (一) はイッチにはならない」という。『かたこと』の記述も副詞としての強調を取り上げていると考えられる。

⁴ 注3文献では「ひとつつ」という促音挿入形はすべて「ひとつも～ない」という場合にのみ生じることが指摘される。この例も副詞としての強調と考えられる。

えると、ここで貞室によって問題とされているのは臨時的な促音挿入形であると言える⁵。

つまりこの記述からは、促音挿入形が「原形とは異なった意味を持つ語」として定着しているものや、すでに「促音を持たない語形と対応を失っているもの」は、あらかじめ評価の対象から除かれているか、評価は与えられないと考えられる (b. 評価表現なしを参照)。以下は 24~28 と同様の例とみなせるものである。

80. 疾 (どく) [ママ] とゝいふべきを ○とつくとはいかゞ

92. ひしとゝいふべきを ○ひつしとゝ詰 (つめ) て云ること如何。[下略]

100. いづこ○いづく○いづちなどいふべきを○どこといふはくるしからず○それをどつこと○つめたるは如何。

662. ふつといふべきを ふつつとつめていふは○時 (とき) によりて苦しからぬこと敷 [中略] ふつと○ふつつなどいふは○緒 (を) や紐 (ひも) などのきれ侍る音を○やがて言葉に用 (もち) ひそめたること敷

次の例も同様に考えてもよいと思われるが、複数語形に対して一括する形で評価が与えられている。

261. 音 (をと) もせひであれなどいふべきを○をつとせて○をつとしかひで○をつともせひでなどゝいふはいかがゞ

663. 其儘 (そのまゝ) そこにあれと云べきを○やつぱり。やはり。やつぱしなどいふは如何。此うちにもやはりといふこと葉は若 (もし) 矢張 (やはり) の字 (じ) 敷弓 (ゆみ) に矢 (や) を引くはへて。むかふ敵 (かたき) を射 (い) すまさんと心にくすみて待 (ま) ちまふけたるやうのこと敷

663 条は原形「やはり」にも促音挿入形と同様の評価が下されているが、その後で原形だけは語源解釈が与えられている。以下にも見るように、『かたこと』では全般的に語源解釈により正統性が示される場合には評価を保留したり⁶、消極的ながらも肯定的評価を与えたりする⁷傾向がある。よってこの例では原形を促音挿入形と一括りに評価しているとは断定できない。次の 51 条は原形に正統性が与えられたために促音挿入形の評価が下がったものである。550 条は語源解

⁵ 注 3 文献によれば「発音上の強調性が加わるというばあいには、発音だけを強調して語調をととのえようとするものと、発音を強調することによって意味を強調しようとするものがあるものと見られる。もっとも意味の強調性の有無ということは明確にはとらえにくいところもあるが、おおよその区別はつくものと思われる」とするが、本稿では注 3 の記述に従い副詞的に用いられる可能性のあるものは意味の強調ありとみなした。

⁶ 例えば次の例を参照。「79. 捨 (すつ) るといふべきを。ふつるといふは如何。又ふてゝなどいへるは心かはれり。敵 (ふつる) と書る敷観面 (てきめん) のこゝろ敷。但すつる。ふつるも心はかよひ侍る敷」

⁷ 例えば次の例を参照。「676. なめのゆるといふべきを○なへのいるといふは如何。地震 (ぢしん) のゆるとは有べし。ゆくといふはいかゞ。但ゆりもてゆく物なれば。ゆくとも云べし」

釈がなされるが、歌語と比較され「きゝあしくや侍るらん」と評価される。

51. ひた物といふべきを ○ひつた物といふは如何。但(たゝし) 苦(くる) しからぬにや。ひたといふは。直胃(ひたかぶと) 又鹿(しか) おどろかしの引板(ひた) より出(いて) たること葉にや。又ひつたりといふは。引板(ひた) ひく音(をと) 成べし。又括(くゝ) し鹿子(かのこ) の染物(そめもの) などの時のひたは。直胃(ひたかぶと) の直(ひた) の字敷。又意趣(いしゆ) もなくて籠居(ろうきよ) し侍るを。直隠(ひたやごもり) といふこと。源氏(げんじ) に侍るが此ひたにてや侍らん。然(しか) らはひた物は直物(ひたもの) にて侍べしひつたといふはよろしかるまじき敷

550. 泥亀(どうがめ) を ○すつぼん○すぼんなどゝいふは如何。此亀(かめ) のなくこゑの。すぼんといふによて。頓て名(な) になれるかといふ人も侍り。[中略] 郭公(ほとゝぎす) 雁(かり) なども。なき侍る声(こゑ) の即(すなはち) 名に成たるとかや。さるによて此二鳥(じてう) の啼(なく) をは。名のると歌(うた) にもよめり。又かり金(かね) とは。雁(かり) が音(ね) といふ心とぞ。然れども。人すい亀(がめ) をすつぼんといふは。きゝあしくや侍るらん。[下略]

456 条は後述するように意味の強調を伴うとは見なしがたい例である。

456. 沃懸(いかげ) 地(ゝ) を ○いつかけ地は如何不苦敷

b. 評価表現なし

このグループで多数を占めるのは、次の擬音・擬態副詞である。これは 683 条から 740 条まで続き、「くんじり」などの撥音挿入形も含む。こうした語は 740 条では「右五六十のこと葉は大かた音響をもて。頓而(やがて) 唱(とな) ふる敷」と説明されており、各条文の語源解釈的な説明と対応する。これらは「今日の擬音語・擬声語」*や擬態語に相当する。

684. ひつたりといふは。うすくひくき物の。水(みづ) などにひたりて。物につきたるをいふにや

685. びつたりはぬれたるかた敷。強(つよ) うぬれたるやうのかたち成べし

688. へつたりは○ひら／＼座(ざ) する貌何にてもひらめなる物をすへたるをいふ敷
(以下、27 例は省略)

740. かんごりは [中略]

右五六十のこと葉は大かた音響をもて。頓而(やがて) 唱(とな) ふる敷。皆をしはかりの注(ちう) なれば誤(あやまり) のみ成べし。よく心得ていうべき敷。[下略]

「如何」のグループでは、促音挿入が問題となるのは臨時的に挿入される場合であることを述べたが、ここで取り上げる擬音・擬態副詞ではどうか。まずこれらは規範形と非規範形を対比させる、基本的な形式をとっていないことに気づく。

⁸ 白木 進・岡野信子 1979 (p.60)。またロドリゲス『日本大文典』(土井忠生訳 1955) p.290 にも「音響や事物の状態を意味するもの」として類例があげられている。

このことは一見、貞室はこれらの語を完全に非臨時的で規範的だと見ているのではないかと思わせる。

しかしこれは、当該期における擬音・擬態副詞が促音を持たない語形を潜在的にすら想定しないものであるとか、あるいはすでに非促音挿入形とは別の意味や用法を持つ別語形として固定化したことを、ただちに意味しない。例えば「699. につこりは○笑ふ貌歟」の下線部について邦訳日葡辞書（土井忠生他訳編 1980）では「Nicco.l, niccoto」「Niccorito」の促音挿入形を掲出すると同時に、「Niconicoto」「Niconicoto xite」をも同義の語として掲出している。「にこり」という語形こそ掲出されないが、促音を持たない「にこ」という形態素を両者が共有している可能性はある。また現代語においても「にこり」「につこり」は重複した意味領域を持ったまま併存している。これらのことから『かたこと』に掲出された擬音・擬態副詞は、促音を持たない形と潜在的であれ対応関係を持っていたものと推測される⁹。

そもそも何の問題もないのであれば『かたこと』にこれらの語は取り上げられることもないだろうし、ましてや 740 条に見られる説明もなされないだろう。以上のことから、683 条～740 条にあげられた評価表現なしの語は、促音を持たない語形を潜在的に保持し臨時性・非規範性を帯びつつも、非臨時的・規範的であると解釈した。つまり第 2 節で触れた現状容認の各段階が、「如何」のグループと「評価表現なし」のグループとの違いであらわれていると考えるのである。

次の 10 例は評価表現を欠くが、意味の強調を伴うと考えられる。

116. 扱々を ○はて／＼はつてさて○はてさつて○はつてはて

128. いつもを ○いっつも

198. 不図（ふと）を ○ふつと不斗（ふと）とも与風（ふと）とも書歟

244. 無左（むさ）とゝいふべきを ○むつさ○むつた○むたきた [下略]

254. 曾而（かつて）を ○かつつて

258. 歴々（れき／＼）を ○れつき／＼

274. 先ほどを ○さつきに

276. 一日（ひとひ）を ○ひつ（ツ）とひ

277. 夜（よ）一よといふべきを ○よつびとい

280. 朝毎（あさごと） 晩毎（ばんごと）などを ○朝ごつとい○ばんごつとい [下略]

次の 8 例については、意味の強調を伴うとは考えがたい。岸田武夫 1981 によれば語調を整えるために「漢語の複合語（もしくは接頭語をもつ語）において、前部要素（もしくは接頭語）か後部要素のどちらかが一音節であるばあい、後

⁹ 注 6 引用文献では、促音挿入形には原形とは異なった意味用法を持つに至った例もあるとされるが、『かたこと』においてはそのような区別がなされているとうかがえる記述はない。

部要素の前に促音の添加されることの多いこと」が指摘されるが、『かたこと』内では同じ条件で促音が挿入されないものもあり、不明である。

193.奇怪(きくはい)を ○きつくわい¹⁰

296.座頭(ざとう)を ○ざつとう

299.老(おひ／としより)を ○としより○とつしより¹¹

327.鉢(はち)ひらきを ○はつちひらき

361.頭巾(づきん)を ○ずつきん

413.行器(ほかい)を ○ほつかい

415.茶巾(ちやきん)を ○ちやつきん

416.茶筌(ちやせん)を ○ちやつせん

(2) 肯定的評価

「よし」「少しも苦しからず」などの評価表現を含む条文を取り上げた。

281. [中略] 三日(みか)をみつか。四日(よか)をよつかといふがよしと云り。みか。よか。もよし

316.穢多(えた)を ○えつた。但つめて云馴(いひなれ)たればかやうのことは苦しかるまじ敷

317.癪病人(らいびやうにん)を ○かたいぞかつたいぞはよし但かたいは乞児(こつし)と書(かけ)れは。乞食(こつじき)の惣名(そうみやう)敷。[下略]

344.二人(ふたり)三人(さんにん)四人(よにん)といふべきをさんにんよつたりといふことは少しもくるしからず。よたりと歌(うた)にはよみたれともつねにいふには耳(みみ)にたちてわろし [下略]

281 条について『日本大文典』では、「Fitoi (ひとひ) , 又は, Fifitoi (日ひとひ) Futuçuca (二日) , Micca (三日) , Yocca (四日) [下略]」(p.763) などの記述があるが、「Mica」「Yoca」は見あたらない。316 条は日葡辞書では「Yetta」「Yeta」で立項されており、後者は空見出しとなっている。317 条は日葡辞書に「Cattai」と立項され、「Catai」は見あたらない。344 条も『日本大文典』(p.818)に「yottari (四人)」、日葡辞書にも「Yottari」と立項される。若干時代はさかのぼるが、規範的とされるこれらの資料にこうした記載があることは、貞室の時代にこれらの語形が非規範的と捉えられていたとは考えがたい。317 条については不明であるが、他の条文と同様と推測される。

肯定的評価がなされているものは 4(1)a で述べた、「すでに促音挿入形が促音を持たない語形と対応を失っているもの」に該当する。

(3) 否定的評価

¹⁰ 注 6 文献では意味の強調を伴うとされる。

¹¹ 白木進 1976 では「しよ」は拗音であり、一拍減った分を補うために促音化したとする。

「俗語」「あしかるべし」「わろし」「わかるべし」の評価表現を含む条文を取り上げた。53、55、99、115 条は副詞的用法で強調の意味を含む、臨時的な語形と考えられる。55、99 は語源解釈により原形に正統性が与えられ促音挿入形に否定的評価が下される。53 条は不明。115 条は並列的に掲出された語への批判の可能性もある。505 条は強調の意味を含まない臨時的な語形と考えられる。

53. 物のせまりをぜつびといふこと葉は。是非(ぜひ)といふ心歟。とにかくぜつびは浅(あさ)ましき俗語(ぞくご)成べし。(第2節にて既出のため下略)

55. 同じく。いかいことゝいふはよろしきにや。若(もし)位階(いかい)といふことより出たる歟。それをいつかいとはあしかるべし。但(たゞし)いかいとはいかめしひとの中略歟

99. あちこちといふべきを 〇あつちこちなどつめていふはあしかるべし。歌(うた)には。あちの山とよめり。こち近(こち/ちかき)の字歟。あちらこちらの。らは付字なればくるしかるましき歟

115. 是斗(こればかり)といふべきを 〇是(これ)ばつかし〇是(これ)ばつちや〇こればつかりなどはわかるべし

505. 柚柑(ゆかう)を〇ゆつかうはわろし。[下略]

5. 撥音挿入形について

撥音挿入形について触れられる条文も促音挿入形同様に分類する。なお促音挿入形とことなり、肯定的評価はなかった。

(1) 中間評価

a. 「如何」を含むもの

28 条下線部(1)の記述が 24~27 条の促音挿入形のみを対象とするのか、撥音挿入形も対象とするのかがまず問題となる。直接的には「つめて」と限定しているが、下線部(2)では撥音挿入形にも言及しているし、24 条でも掲出されている。また、

117. 余(あま)りを 〇あんまりと。はぬるもいらざること成べし
では 115、116 条が促音挿入形であるのを受けて、「はぬるもいらざること」としている。こうしたことから、28 条下線部(1)の記述は撥音をも含意し、撥音挿入形を非規範形とみなしていると考え、以下分析を行う。

24. 唯(たゞ)といふべきを 〇たつた〇たんだ

28. [既出のため中略] 右(みぎ)いつゝのこと葉を。かやうにつめていふこと如何といふ人も侍り、但(たゞ)うへより云つづけ。又いきおひかゝりていふ時(とき)は。くるしからじといへども。いはぬにはしかじ。[中略] 頃(このころ)ある人の。べによりあかきたんだ今(いま)。[中略] などゝいふ狂句(きやうく)したるをきゝ侍り。いかゞ侍らん。[下略]

90. 不断(ふだん)といふべきを 〇ふんだんなどいふこと如何

679.滑(なめら)かなることを ○ぬめるぞすべるぞとは苦しからぬ歟。ぬんめりは如何

促音挿入形の場合、このグループは臨時的な意味の強調が認められるものが12例あったのに対し、促音挿入形で明らかにそれと認められるのは24、90条のみである(679は非撥音挿入形と対比されないが、「ぬめり」の強調形か)。

96条「ぎんぎだうだん」は「言語道断」(『日葡辞書』Gongo do&dan)との語形上の類似で生じたものか。401条では撥音挿入形が「鬢」への類推から生じたかと解釈されている。

96.巍々堂堂(ぎぎたう／＼)といふべきを ○ぎんぎだうだんといふは如何

401.美男石(びなんせき)を ○びんなんせきといふは如何但びんは鬢(びん)歟美可然と云り

b. 評価表現なし

促音を持つ語形の場合、このケースで多数を占めるのは擬音・擬態副詞であった。撥音を持つ語形も促音のと同様に、撥音を持たない語形を潜在的に保持し臨時性・非規範性を帯びつつも、非臨時的・規範的であると解釈した。

737.くんじりは ○くじけたる音歟

740.かんごりは ○かごやかにおくまりたるかた歟

(類例 700, 704, 733 は省略)

以下の漢語7例は意味の強調は伴っていない。促音挿入形でみたのと同様に語調を整えるために撥音を挿入したか(どれも前部要素は一音節である)。

110.施行(せぎやう)を ○せんぎやう

275.以前(いぜん)を ○いんぜん○いんぜ

281.二月(きさらぎ)を ○にんぐはち共。四月(うづき)を しんぐはち共。[下略]

356.木綿(もめん)を ○もんめん

374.薬研(やけん)を ○やんげん

480.腫物(しゅもつ)を ○しんもつ

516.牛房(ごぼう) ○ごんぼ○ごんぼう

以下の7例は和語で意味の強調を伴わないものである。語調を整えたものか。上記5例とあわせて『日葡辞書』には撥音挿入形は立項されていない。

124.皆様(みなさま)を ○みんなさま

260.構而(かまへて)を ○かんまいて○かんまへて

278.きのふを○きんのう [下略]

527.紫陽草(あちさい)を ○あんさい○あんじさい

545.土鯨(どちやう)を ○どんちやう○どんちよ

555.蕎(とび)を ○とんぴ

600.桜馬場(さくらのばゞ)を ○さくらのばんゞ

以下の2例は意味の強調を伴った可能性がある。

113.同 (おな) じことを○おんなじこと

237.頼而 (やがて) を○やんがてやかてと清 (すむ) こと

(2) 否定的評価

「わろし」「わかるべし」「よろしからぬにや」などの評価表現を含む条文を取り上げた。114 条は「といふもわろし」の「も」に注目すると、単に促音挿入形であることのみを対象として評価していない可能性がある。574 条は『日葡辞書』には「Vdon」「Vndon」が立項されているが、「ゆき過 (すき) て」とあることから撥音挿入形は過剰修正の指摘がなされたものと考えられる¹²。672 条は意味の強調を伴うと推測される。なお評価「よろしからぬにや」は便宜的に否定評価に含めたが、否定の度合いは重くはない。

こうしてみると撥音挿入が原因で否定的評価がなされていると明確に判断できる例はないことが分かる。この点で促音挿入とは異なる。

114.をのづからと云べき時にをのづと云人あり如何。但 (たゞし) 自 (をのづから) のからを下略 (げりやく) して云たること葉歟。又自然 (しぜん) といふべきをしんぜんといふもわろし [下略]

574.温飩 (うどん) を ○うんとんど [ママ] いふもゆき過 (すき) てわろしとかや

672.つめたきといふべきを ○つべたい○つんめたいなどいふはよろしからぬにや。
[下略]

6. 促音・撥音挿入形まとめ

4・5 節で促音・撥音挿入形の具体例とその評価をみてきた。検討を行った語と、条文の記述・日葡辞書等の他資料との比較から、臨時的で強調を伴わないもの (語調を整える)・臨時的で意味的な強調を伴うもの・臨時的ではないもの・そのほかの四つに整理し、促音挿入形と撥音挿入形についてまとめると表のようになる (数字は例数)。

表からは、促音・撥音ともに否定の評価表現をとるものは、臨時的な語形であることが分かる。逆に肯定の評価表現をとるものは臨時的ではないことが分かる。「如何」「評価なし」の評価

		促音				撥音			
		否定	如何	評価なし	肯定	否定	如何	評価なし	肯定
臨時的	強調伴わず	1	1	8	0	1	0	13	0
	強調伴う	4	12	10	0	1	3	2	0
臨時的ではない		0	0	31	5	0	0	2	0
そのほか		0	2	0	0	1	2	0	0
小計		5	15	49	5	3	5	17	0
合計		74				23			

¹² 重頼『毛吹草』(加藤定彦編 1978) でも「饅飩 (うどん)」「(三 120 ウ 7 ほか 2 例)」という記載があり、また「とかや」とされることからも、同門の人間や師説の影響も可能性として考えられる。

表現をとるものは臨時的な語形を多く含んでいるが、これは使用が広がっている場合に現状容認する貞室の姿勢と対応するものと考えられ、従ってこれらの語形の口頭語における使用は広がりを持つものであったと推測できる。ただし「評価なし・臨時的ではない」（促音 31 例 撥音 2 例）には擬音・擬態副詞が分類されているが、4、5 節で触れたように肯定の評価表現を下されるほどには意識されていなかったと考えられる。

7. 促音挿入形と撥音挿入形の意識上のちがい

最後に促音挿入形と撥音挿入形がそれぞれ貞室にどのように意識されていたのか、そしてそれが何を反映するものであるかについて若干の考察を述べておきたい。前掲浜田論文では、促音・撥音の音韻的な区別は室町時代末頃まで「極めて漠然たるもの」であったとされるが、『かたこと』では促音を「つめて」（28 条ほか）撥音を「はぬる」（114 条ほか）と観察しており、区別は截然となされている。問題は、両者は等価に意識されていたかという点である。上表を見ると、促音挿入形について触れた箇所が撥音挿入形の約三倍にのぼることが分かる。両音節が現れる条件自体にこの格差の要因を求めることは困難であるから、これは貞室自身の規範意識の違いに基づくものと考えた方がいいだろう。すなわち貞室は促音挿入形に対して、撥音挿入形よりも大きな心理的抵抗を感じており、それが「気づき」となったために促音挿入形の条文数が増えたのではないか。そう考えると次の記述は示唆的である。

660. ちいさき物を○ちんまり○ちよつぼり○ちつぼり○ちよぼ／＼○ちよつこり○ちぼ／＼などいふこと葉。よしあし知侍らず。中にてても○ちんまり○ちんぼり○ちよぼ／＼○ちよぼ／＼などはやさしう聞え侍る歟 [下略]

ここに挙げられる複数語形のうち、促音を持つ語形だけが「やさしう聞え侍る」という評価から除外されている。「前者（促音）が発音を突然停止して詰屈な急迫した感じを与えるのに対して、後者（撥音）はその停止すべき呼吸を鼻腔に抜く為に、促音よりもなだらかな静穏な感じを与えるもの」（浜田論文 p.64, ()内は稿者）という印象を、17 世紀中頃の貞室も抱いていたのであろう。

ところで柳田征司 1993 (p.842～) では抄物の分析を通じ、促音挿入形は室町時代以前、使用頻度の東西差は認められず、江戸時代以降東部方言に特徴的となるという。この指摘にしたがうならば『かたこと』が著されたのは、ちょうどその変化期にあたることになる。貞室はこの促音＝東部方言・非京都語的特徴となりつつある状況を、一方で京都語内における非京都語の混在と受け止め、『かたこと』に取り上げたのではないだろうか。促音・撥音から感じられる音声的印象とこうした音韻史的背景によって、『かたこと』条文が促音挿入形にかたよる結果を生じたと考えられるのである。

以上、『かたこと』内の促音・撥音挿入形にかかわる条文について、それぞれ

の評価表現の相違がどのような要因にもとづき生ずるのか、また両者がどのように受け止められていたのか考察を行った。

(かとう だいかく／文学研究科日本文学専攻 博士課程2年)

【参考文献】

- 阿部八郎 1974 「安原貞室『かたこと』の規範意識」(国語研究 37)
- 阿部八郎 1981 「安原貞室『かたこと』の用語・符号」(近代語研究 6)
- 乾 裕幸 1975 「重頼と正章の確執をめぐる一俳諧論戦史の内ー」(親和国文 9)
- 井之口有一・堀井令以知 1972 『京都語位相の調査研究』(東京堂出版)
- 加藤定彦 1978 『初印本毛吹草 影印篇』(ゆまに書房)
- 岸田武夫 1981 「促音添加の現象についてー主として意味との関連において」(近代語研究 6)
- 白木 進 1976 『かたこと』(笠間書院)
- 白木 進・岡野信子 1979 『「かたこと」考』(笠間書院)
- 天理図書館綿屋文庫編 1957 『氷室守』(天理図書館)
- 土井忠生訳 1955 『日本大文典』(三省堂)
- 土井忠生・森田武・長南実編訳 1980 『邦訳日葡辞書』(岩波書店)
- 中村俊定 1944 「松江重頼の研究」(『日本古典新攷五十嵐力博士記念論集』東京堂所収)
- 浜田 敦 1949a 「促音と撥音(上)」(人文研究 1-1, 浜田敦 1986 を参照した)
- 浜田 敦 1949b 「促音と撥音(下)」(人文研究 1-2, 浜田敦 1986 を参照した)
- 浜田 敦 1986 『国語史の諸問題』(和泉書院)
- 森田 武 1993 『日葡辞書提要』(清文堂)
- 柳田征司 1993 『室町時代を通して見た日本語音韻史』(武蔵野書院)
- 山口仲美 1973 「続中古象徴詞の語音構造ー撥音・長音・促音に関する問題をふくむ語例を中心にー」(共立女子短期大学文科紀要 16)